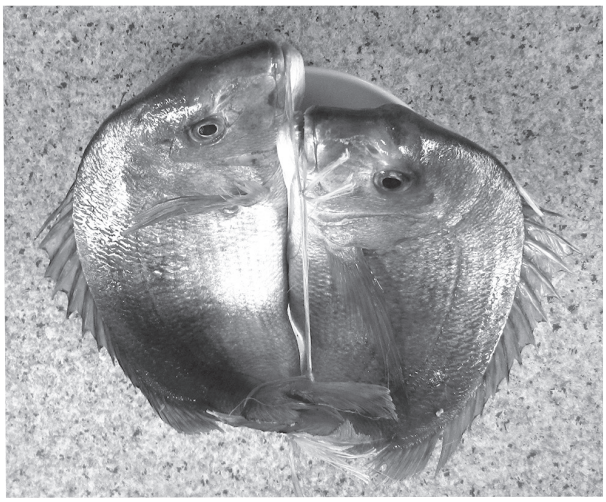
三石さん

発 行 所
三石神社社務所
神戸市兵庫区
和田宮通3丁目2-51
TEL (078)671-2531
FAX (078)671-7667
E-mail info@mitsuishi.or.jp
URL http://mitsuishi.or.jp

○ご家庭・会社事務所に神棚を祀りましょう。
○お伊勢さんのお神札（神宮大麻）と三石さんのお神札を合せ奉斎しましょう。
○お神札は、毎年末もしくは新年に新しく改めてお祀りしましょう。

神功皇后と鯛

三石神社宮司　小林友博



掛鯛

師走の候、氏子崇敬者の皆々様におかれましては、ご健勝にてご活躍のこととご同慶に存じます。又、年頭の正月より一年間各種神事行事に対しましてご崇敬ご奉献を賜り厚く御礼申し上げます。

さて、ご高承の通りご神前には海川山野の種々の味物をお供えし、海の物は主に鯛である。鯛の赤色は邪気を祓う目出度い色とされ、特に「尾頭付き」は神事や結婚式などの慶事で重宝されている。

写真の掛鯛は、九月二十三日に当社を毎年産宮参拝する西宮えびす神社からのお供え掛鯛である（えびす神が釣り上げている魚は鯛で、西宮えびす神社には古来からご神前に鯛を供える習わしがある）。また、掛鯛は祝儀の贈り物として古くから用いられてきた。

ところで、国史による鯛の初見は、『古事記』（和銅五（七一二）年成立）上巻の火照命（海幸彦）の服従の条に、「頃者、赤海鯽魚、喉に鯁ありて、物得食はずと愁ひ言へり」（近ごろ赤い鯛が、のどに骨が刺さって、物を食べることができないと歎き訴えています）と見え、「赤海鯽魚」を「たひ」と訓んでいる。現代語で海鯽魚・鯽魚・赤海鯽魚すべてを「たい」と読んでいる。しかし、現在の漢字辞典では「鯽」を「ふな」と訓し、コイ科フナ属の淡水魚の総称としているが、ここでは「海」・「赤海」が冠されているところから、海水魚の「鯛」とするのが妥当である。

本居宣長（江戸時代中期の国学者。国学四大人の一人）の『古事記伝』（寛政十（一七九八）年完成）十七之巻神代十五之巻の赤海鯽魚の条には、「赤海鯽魚は、多比と訓べし、鯛なり、書紀（『日本書紀』）には、赤女とありて、赤女鯛魚名也と注あり、一書には赤女或云赤鯛とあり、又一書には、鯛女、又一書には、赤女とありて、即赤鯛也と注せり、さて仲哀巻に、海鯽魚とあると、和名抄（『和名類聚抄』。平安時

代の漢和辞書。源順撰。承平四（九三四）年頃成立とされる）に、弁色立成（『弁色立成』。八世紀成立の辞書）云、海鯽魚知沼（『和名抄』巻十九の海鯽の条）、とあるとを合せて見れば、赤海鯽魚は、鯛なること決し、【知沼は鯛の色灰色き物にて、黒鯛の類なり、和名抄に、知沼と久呂多比とは別なれど、遠からぬ物なり、さてつねの鯛は、知沼と形全く同くて、色赤き故に、赤海鯽魚と書るなり、檀を白祷と書るたぐひなり、又仲哀巻なるは、色の赤き黒きを一つにして、海鯽魚を鯛にあてたるものなり、凡て古書に、物の漢名を書ること、其人の心々にて、右の如く少しづつの違あり、彼此をよく考合て、定むべし、よくせずはまぎれぬべきものぞ、】多比は、和名抄には、崔禹錫食経（本草学書の『崔禹錫食経』。中国唐以前の佚書の一つ。崔禹錫撰とする）云、鯛、味甘、冷無毒、貌似鯽、而紅鰭者也、和名太比と見え、字鏡（漢和辞書の『字鏡』。撰者・成立年時不明。平安後期頃の成立か）にも、鯛太比とあり、【師（賀茂真淵。江戸時代中期の国学者。国学四大人の一人）は、此の赤海鯽魚をも、書紀に依て、アカメと訓れたり、其もさらことなれども、此記の例、若あかめならむには、直に赤女と書べきなり、さて又書紀の赤女を、赤鯛也とあるに依て、或説に、鯛の中の一種、殊色赤きなりとするは、わろし、後世にこそさもあらめ、上代には、さばかり細に分て、名くることはなかりしぞかし、赤鯛とあるも、即よのつねの鯛にて黒鯛の類もあるに対へて、赤字は添たるものなり、然るにかの仲哀巻に、海鯽魚をタヒと訓るにつきて、此の赤海鯽魚をも、アカダヒと訓て、かの殊に赤き一種と心得るは、非なり、又アカチヌと訓るも、非なり、】と説いている。

さて、神功皇后と鯛との関りは、『日本書紀』（養老四（七二〇）年成立）仲哀天皇二（一九三）年六月の条に、「皇后、角鹿（福井県敦賀市）より発ちて行して、淳田門（広島県三原市幸崎町能地の沼田川下流の南の海岸地の青木迫門（瀬戸）に比定）に到りて、船上に食す。時に、海鯽魚、多に船の傍に聚れり。皇后、酒を以て鯽魚に灑きたまふ。鯽魚、即ち酔ひて浮びぬ。時に、海人、多に其の魚を獲て歓びて曰はく、『聖王の所賞ふ魚なり』といふ。故、其の処の魚、六月に至りて、常に傾浮ふこと酔へるが如し。其れ是の縁なり」（皇后は角鹿から出発して、淳田門に至り、船上で食事をされた。そのとき鯛がたくさん船のそばに集まった。皇后は鯛に酒をそそいだところ、鯛は酒に酔って浮かんだ。ところで漁師はたくさんのその魚を得て喜んで言った。「聖王（神功皇后）のくださった魚だ」と。そこの魚は六月になると、いつも浮かび上がって口をパクパクさせ酔ったようになる。それはこのこと（皇后が鯛に酒をそそいだ）による）と、淳田門の故事が記され海鯽魚、鯽魚を「たひ」と訓んでいる。しかし、伴信友（江戸時代後期の国学者）は、『神社私考』（神名、神道に関する考証。天保十二（一八四一）年成立）四の常神社（福井県三方上中郡若狭町常神に鎮座）の条で、福井県三方上中郡若狭町三方の常神崎付近を淳田門の遺称地とするが、広島県三原市幸崎町の能地には浮鯛神社と呼ばれる神功皇后を祀る浮幣神社もあり、神功皇后の鯛故事地とされ、『厳島道芝記』（元禄十五（一七〇二）年刊、小島常也著）、停田門は安芸国の海面にある地名也、今豊田郡の浦辺に能路（能地）と云所あり、鯛の魚必うきぬ、此を能路のうきたいとて、人得て甚賞翫す、時節は春にて、弥生の三日を当日とす」と見え、また、『大日本地名辞書』（明治三十三～四十（一九〇〇～一九〇七）年。吉田東伍著）には「今も年々まさしく浮鯛ありて、皇后の故事を伝へり、淳田門の青木迫門にあたれるは疑べきにあらず」と記している。

浮鯛の故事は和歌にも見える。『新撰六帖題和歌』（和歌集。藤原（衣笠）家良他の詠。鎌倉時代の寛元二（一二四四）年以内の成立とされる）第三の水の条（九七八番）に、「水無月や、君のなさけに、あひそめて、うくてふ鯛は、今も有とか」の藤原知家（鎌倉時代の公卿。歌人）の詠歌が見え、また『夫木和歌抄』（鎌倉時代後期の私撰和歌集。藤原（勝間田）長清編。延慶三（一三一〇）年頃成立）にも正三位知家卿（藤原知家）の鯛（六帖題）と題し収められている。

令和三年十一月

七五三詣祈祷斎行

十一月中、七五三詣祈祷を斎行した。

本年は新型コロナウイルス感染拡大の関係もあって参拝者もやや少なめであった。

当社では七五三に当たる子供さんの玉串奉奠や、拝殿内での記念写真撮影も行い、千歳飴やオモチャ・風船・おみやげセット等の他にキャラクターバック等の記念品もお渡しして大変喜ばれました。

土・日・祝日に限らず期間中には会館二階に特設写真スタジオを設け、記念写真を撮っていただけるよう設備しています。また、お宮参り・成人式・長寿祝（還暦・古希など）記念写真にもご利用下さい。但し、必ず予約をお入れ下さい。

特設スタジオでの記念写真

関西テレビ「兵藤大樹の今昔さんぽ」取材来社

テレビ放映画面

二十四日、関西テレビ放送のニュース番組・報道ランナーの「兵藤大樹の今昔さんぽ」の兵藤大樹氏が、昭和三十年代の神戸市電和田岬高架取材で当社を訪れた。

当社で和田岬高架を知っているのは晴美権禰宜のみであり、神社蔵の昭和二十九年の市電和田岬高架が写っている馬に乗った前宮司の神幸式写真を見せつつ、当時の神幸式の様子と市電の思い出などを話し取材応対した。

尚、この様子は十二月十日にテレビ放映された。

裏話であるが、放送中の「兵藤大樹の今昔さんぽ」では突然訪問して取材したようになっているが、一週間前に放送ディレクターが来社打合せを行っている。

テレビ放映画面

令和四年一月

柔道選手・阿部兄妹の優勝御礼参拝

初詣で賑わう元旦（午後二時頃）、東京オリンピックの柔道で優勝した阿部一二三・詩兄妹選手が御礼参り参拝した。

参拝祈願絵馬に、一二三選手は「超越」、詩選手は「勇猛果敢」とそれぞれ願って絵馬掛に吊るした。尚、当社から優勝祝いとして額入りイラスト画「神戸風景」を一額づつをお渡しした。

尚、十月にウズベキシタンで開催された世界柔道選手権タシケント大会で、阿倍兄妹選手は当社勝運ご利益を得て、共に優勝した。

新聞報道見出しに「阿部兄妹再び世界制覇」・「一二三　宿敵撃破、深まる自信」・「詩　手術越え、本来の輝き」と記された。

今後の活躍を願ってやまない。

大絵馬の前で祈願絵馬を持つ阿倍兄妹

阿部兄妹 再び世界制覇
一二三 宿敵撃破、深まる自信
詩 手術越え、本来の輝き

世界柔道選手権優勝
新聞記事

年頭氏子崇敬者繁栄祈願祭斎行

正月三日、新型コロナウイルス感染の中ではあったが、「氏子崇敬者繁栄祈願祭」を総代・氏子崇敬者二十五名の参列のもと厳かに斎行し、今年一年の参列者各位はもとより、氏子崇敬者更に各事業所の安寧と繁栄を祈願した。

本年の神前奉納は、新都山流尺八竹淋軒大師範井藤麗山師に入門、昭和五十六年、師範の免許を取得し、現在神戸市・三木市などで後進の指導・育成に努められている竹尾青山先生による「江差追分」、「奥州薩慈」二曲の演奏である。

「江差追分」はいろいろな歌われ方をしていたが、明治四十一年に各流派の要人が集い、現在の「正調江差追分」に統一された歴史があり、一般的には本唄の部分が歌われている。二曲目の「奥州薩慈」の「薩慈」は梵字で観世音菩薩の種子を表す言葉といわれており、尺八名人と誉れが高い神保政之助が好んで吹奏したことから「神保三谷」とも呼ばれている曲名である。

参列者も先生の吹奏に聞き入りご満悦であった。

式典後、参列者一同破魔矢を持ち、鳥居前にて記念写真を撮ったが、時節柄各位に弁当を渡し直会にかえた。

鳥居前での記念写真

令和四年二月

潜水艦内神棚入魂修祓式斎行

三菱神戸造船所で建造中の水中音波探知機の探知能力や船体の静粛性を高めた最新潜水艦「たいげい」（「たいげい」型の一隻目）の引き渡し（三月九日）に先立つ、十一日、神棚（三石神社奉安）入魂修祓式を斎行した。

進水式

当日は艦内ということで斎場が狭いため、艦長・機関長の予定者始め十数人の参列であったが、航海安全と乗組員の健康を祈願玉串拝礼では、代表者に合わせ一同が一つ音で拝礼する状に、乗組員たちの厳正なる規律心と力強さが表れていた。

三月の引き渡し後は、操縦訓練をしながら広島の呉基地を目指すそうである。尚、「たいげい」引き渡しのことは三月十日の「神戸新聞」朝刊などで報道された。

令和四年五月

例大祭斎行

新型コロナウイルス感染が終息していない状況ではあったが、二十日～二十二日斎行の例大祭のうち、土・日曜日の子供みこし巡幸、神幸式は中止としたが、例祭は通常通り二十日（金曜日）午後六時に、助勤神主一名の奉仕により、総代始め氏子崇敬者十九名の参列のもと（新型コロナウイルス感染関係により例年より参列少なし）、「新型コロナウイルス感染を始め諸々の病い気も無く」と祝詞奏上した後、巫女による神楽は本年もコロナウイルスを断ち切るという祈願も込め、刀を持って舞う「剣の舞」を奉納し厳粛に斎行した。

祭典後の直会は、時節柄、参列者各位に弁当などを渡して直会にかえ

最新潜水艦「たいげい」出航
三菱重工神戸 海自に引き渡し

引き渡し新聞記事

た。

巫女による
「剣の舞」奉納

令和四年七月

夏越祭（夏祭り）斎行

十七・十八日の両日、相殿に祀る素盞嗚命（すさのおの）の夏越祭（茅の輪くぐり神事）を斎行した。

新型コロナウイルス・オミクロン株感染終息に至らない時期ではあったが、ワクチン接種者も増えており、また、夏越祭は疫病退散・無病息災祈願の祭であるので、一人でも多くの氏子崇敬者の方々が新型コロナウイルスの感染も無く、無病息災で過ごしていただきたく従来通り斎行した（但し、例年の神前奉納、琉球舞踊は中止した）。

十七日午後六時からの殿内祭典には、総代・氏子崇敬者九名参列のもと（新型コロナウイルス感染関係により例年より参列少なし）、宮司が大祓詞・祝詞奏上の後、参列者代表各位が玉串奉奠した。

更に、境内に設けた「大茅の輪くぐり」神事では、宮司・禰宜に続き参列者一同が『拾遺和歌集』に収められている古歌「水無月のなごしの祓する人は千歳の命のぶといふなり」をはじめ、「思ふこと皆つきねとて麻の葉をきりにきりても祓ひつるかな」・「蘇民将来、蘇民将来」と唱えつつ左・右・左と三度くぐり、人が知らず知らずのうちに犯した罪や過ち、心身の穢れを祓い清め、また新型コロナウイルスの無感染、夏の無病息災を祈願した後、参列者へ神職手作りで無病息災のご利益ある「蘇民将来茅の輪守」と弁当をお渡しさせていただき直会にかえた。

令和四年九月

西宮神社海上渡御産宮参り

商売繁盛の神で知られる西宮えびす神社の和田岬産宮参りの海上渡御は平成十三年、約四〇〇年ぶりに復活し、令和二年に二十回目の記念大規模海上渡御が計画されていたが、新型コロナウイルス感染で延期を余儀なくされていたところ、本年改めて斎行する予定であったが、生憎台風十五号による雨天のため急遽中止となり、午後二時半西宮神社吉井宮司他二名が当社へ産宮参拝した。

参拝は修祓の後、西宮神社奉納の掛鯛が神前に奉納され、吉井宮司玉串拝礼（西宮まつり協議会清水会長、同行神職同拝）、続いて当社総代代表が玉串拝礼（総代同拝）して終え、一同記念撮影して終了した。

御殿前での記念写真

令和四年十月

神社案内道路標識が設置される

由緒ある当社の道路標識が設置されていなかったが、柔道阿部兄妹選手の東京オリンピック優勝金メダル獲得もあって市内はもとより他府県からの参拝も増え、参拝者への神社案内として道路標識設置を希望し、守屋市会議員のご指導・ご協力も得て、総代等の署名を以って「設置願文」を本年五月に神戸市に提出していたところ、十九日、念願の神社案内道路標識が設置された。

設置個所は、県道西出高松前池線の小松通三丁目交差点（東西二ヵ所）、住吉橋線の住吉橋南詰御崎本町交差点（南北二ヵ所）等である。

小松通三丁目交差点の神社案内道路標識

リーチスタッカ入魂修祓式斎行

二十六日大安日、ニッケル・エンド・ライオンス㈱が新規購入した大型の輸送コンテナ（二〇Ｆｔ、四〇Ｆｔ）を吊り上げて移動または積上げしたり（五段積）、コンテナ輸送用車両に積み卸しする高い作業性と安全性の優れた荷役特殊自動車、リーチスタッカ車両の入魂修祓式がポートアイランド営業所で斎行された。

当日は服部社長を始め会社関係者また車両運転手、車両納入業者等約三十名参列のもと、代表者が玉串拝礼して今後の安全と社運隆昌を祈願した。

入魂修祓式神事

社殿屋根葺き替え事業・銅板御寄進者ご芳名

（含　申込・分納・追加、令和三年十一月から令和四年十月末日まで）順不同・敬称略

銅板奉納者全ての方々のご芳名は、神社台帳に記録の上永く保存させていただきますが、境内掲示板のご芳名掲示は三枚以上とさせていただきます。

境内の奉賛芳名掲示板

新生児命名

当社で命名に関係されたお子様のお健やかなご成長をご祈念申し上げます。（命名書のみの受付も行っております。）

令和三年十一月から
令和四年十月末日まで

趣意とお願い

現社殿は昭和三十八年に竣工して、約六十年となります。

銅板の寿命は約七、八十年といわれています。そこで将来銅板屋根の葺き替えを行なわなければなりません。

そのような事情により、皆々様に**銅板寄進（一枚三千円）**をお願いいたしております。

社殿銅板屋根にあなた様のお名前を残し、更なる三石大神のご加護により、貴社・貴家の益々の弥栄をご祈念申し上げたくご案内申し上げます。

既にご奉納いただきました方々には重ねてのご案内となりましたことをご了承下さい。

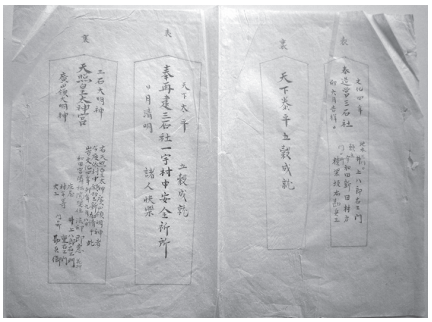
尚、はじめ銅板一枚二千円といたしておりましたが、銅の値上がりもあり、三千円（一、五枚と計上）とさせていただきました。宜しくご理解ご了承をお願い申し上げます。

シリーズ　社務所・境内紹介

今回は神社保存社務古文書の中から棟札記事を紹介いたします。

一〇一年前の大正十一（一九二二）年一月三十一日付で、兵庫県知事に「祭神増加御願届」を提出し、傍証として文化四（一八〇七）年の棟札記載文が添えられている。

その書類（控）は「祭神増加御願」とし、「相殿祭神　天照皇大神・素盞男大神　右相殿祭神二柱は文化四年九月八日に勧請相成居候事発見仕る、神霊に対し奉り恐懼の至りに不堪候、仍て此際増加鎮祭仕り度候條御認許被成下度証憑相添此段御願申上候也　大正十一年一月三十一日　右神社社掌　杉村清太郎㊞　右氏子総代　境米太郎・安原良蔵・大浅田品蔵・中川保平　兵庫県知事　有吉忠一殿」の文面で、その証として左記の文化四年の神社再建棟札記載文を記している。



神社古文書の棟札記事

表に、「奉再建三石社一宇村中安全祈所　天下太平　日月清明　五穀成就　諸人快楽」

裏に「天照皇太神宮　三石大明神　廣嶺大明神（素盞男大神）　右天照皇太神廣嶺明神者、今度依村中願望新勧請于此旨、文化四年卯年九月八日、和田宮隣松院現住　法印即惠（花押）　庄屋　井上八郎右衛門　村年寄　重右衛門　大工　門口町　勘兵衛」と見える。

ところで、この棟札は個人が控として保管していたものを、明治四十四（一九一一）年、神社に引き渡されたようで、別紙に「右棟札貴方に於て保管せられ有之状処、明治四十四年四月中当神社へ引渡し相成、正に受領致し候、依て為後証如件　明治四十五年三月二十一日　三石神社社掌上山閑㊞　田中藤兵衛殿」の控文書も存している。

尚、当棟札は昭和二十年三月の神戸大空襲により焼失し、現存しない。

お知らせ

新年氏子崇敬者繁栄祈願祭ご案内

一、日時　令和五年一月三日　午前十一時斎行

一、会費　金　五、〇〇〇円（記念写真・直会（昼食会食）費代として当日ご持参下さい）

一、神前奉納　竹もの民謡三曲（津軽山唄・十勝馬唄・櫨採り唄）

民謡歌手　山田洋子　先生

尺八伴奏　竹尾青山　先生

※参拝終了後、記念写真・直会（会食）を執り行いますので、ご参列ご希望の方は、十二月二十五日までにご参列のご回答をお願い申し上げます。

※ご参列・直会ご出席の方は、飲酒運転防止の為お車でのご参加をご遠慮下さい。

三石神社諸祈祷ご案内

【殿内個人祈祷】

（殿内における各種祈祷）

家内安全、病気平癒、安産、初宮詣、七五三詣、学業成就、厄除、交通安全、その他

【会社・事業所安全繁栄祈祷】

（会社・事業所団体祈祷は事前ご予約願います）

【出張祭典】

（諸準備の為、事前ご予約願います）

起工・地鎮祭、上棟式、竣工式、入居清祓式、神棚祭、各種安全祈願祭、その他（含　神葬祭）

令和五年の神社神事・行事予定

一月　一日　歳旦祭（初詣）

一月　三日　氏子崇敬者繁栄祈願祭

神前奉納　民謡

五月二十六日　例大祭

二十七日　地区子供みこし巡幸

二十八日　神幸式（おわたり）

六月二十五日　氏子崇敬者親睦旅行

七月　十七日　夏越祭

（琉球舞踊奉納・茅の輪くぐり）

十八日　（茅の輪くぐり）

九月二十三日　西宮神社産宮参り

十月　十五日　秋祭（天照皇大神祭）

各月　一日　月次祭

十一月中　七五三詣

服忌（ぶっき）について

家庭にご不幸があった場合、一般的には五十日間を忌中として故人を偲び、神棚に半紙を貼るなどしておまつりを遠慮します。

忌が明ければ神棚もおまつりし、通常の生活に戻ります。忌の期間が正月をまたぐ場合は、忌が明けてから神社の参拝、また、お神札（ふだ）を受けても差し支えありません。

なお、親戚の方が亡くなられた場合は、お葬式を出したお家でなければ、葬儀告別式後通常のおまつりをしても問題ありません。詳略は当社にお尋ね下さい。

印刷所
(有)前川企画印刷
神戸市兵庫区永沢町三丁目三―十
TEL（〇七八）五七七―二四八八
FAX（〇七八）五七七―七二二〇